
うまい棒ってば、うまい棒！

ごはんライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うまい棒つてば、うまい棒！

【Zマーク】

Z6162Z

【作者名】

じほんライス

【あらすじ】

2000字設定。小説らしからぬ小説。まずはプライベートとフィクションがじつちゃになつてる。それから会話の内容に謎が多い。あと、オチがねえ！
小説じやない小説。

(前書き)

前書きは土つじのここやつ。土ど、底がじるく臭い。

。

うまい棒の30本入り。315円。4袋買つた。3袋は生徒にプレゼントするのだ。クリスマスイブに授業があるから。労いの意味である。

うまい棒の絵は手塚先生とか藤子先生っぽくて好みである。ほぼドラえもんだ。にせドラえもん。

まあそれはともかくとして、正月の1、2、3日が休みである。大晦日は、笑つてはいけないシリーズを観る。録画もする。何をするか。有意義に使いたい。

温泉旅行にはいけない。すぐに予約をとれない。旅費もない。所得が増えない。九万円で停滞している。19万円が13万円になつて9万円。そこで停滞してゐる。

しかし、塾のアルバイトを始めて10年と9ヶ月。一度も旅行に行つてないので、どつかで行かないといけない。一泊一日くらいでいい。行かないと、頭がおかしくなる。

エッチはどうするか……。エッチを一度もしたことない。35歳である。来年の3月に36歳だ。華子とメール交換は始めてるが、なかなかエッチまでいかない。

小説はどうなる。なろうに来てから、5年。今年の11月、すばる文学賞に落選した。一次選考も突破しなかつた。執筆中小説、約1300本。投稿中小説、もうすぐ1000本（旧ライスは長編一本で450本。新ライスは長編4本）活動報告、もうすぐ5000件。書いてる量はものすごいが、なかなか所得に結びつかないので苦しい。

前途多難。

しかし、こういうときほど人のやさしさを知つたりする。

とはいへ、前途多難は前途多難。何とかしないといけない。挫けそうだ。

そんなことを言つていても始まらない。家を出るまであと20分ある。いつも通り2000字設定で書くこととしよう。あと1400字。勝沼敬一郎は、外務省を出てから、居酒屋へ行つた。居酒屋はつちゃんである。大将がハ太郎という名前なのではつちゃんとう。ハ太郎の父親がたこが好きだつたからハ太郎になつた。たこは足がハ本である。敬一郎はカウンターでちびちびやつていた。いい感じで出来上がつた頃に、大山宗次がやつて來た。「敬ちゃん。この前の話、引き受けてくれるかい」「あれか。あれはやめとくよ」「そうか」宗次は、敬一郎の隣に座つた。「敬ちゃんが断つたと松子が知つたら悲しむな」「そういうなよ。仕方ないよ」「まあ。そりやあそうだが。人には事情があるからな」宗次は銘酒妻殺しをぐいと飲んだ。「はーあ。やな世の中だぜ。ちきしきょう」「そういうなよ」「くそつたれ。久留米のやうう。やつてられないぜ」「久留米、元気なのか」「元気過ぎるよ。マジでいつけえ」「そうか」「久留米ぶつ殺す——と宗次は叫んだ。店内は騒がしいので、そんなに目立たない。

いつの間にか、宗次は大将からガットギターを借りて弾いている。敬一郎がコーラスをしてる。

「オレの彼女は、イエイ、イエイ、イエイ」
「イエイ、イエイ、イエイ」

宗次は若い頃にバンドを組んでたことがあるから、なかなか上手い。敬一郎は別に音楽的素養はないから適当に合わせてるだけである。

外で野良犬がわおおおおおんと鳴いた。月も酒を飲んで酔つ払つている。

敬一郎は、宗次に言つた。「宗ちゃん。前に頼んだやつやつておいてくれたかい」「あ。しまつた。忘れてた」「困るよ。いつくら今までにできる?」「そうだな。二週間くらいかな」「一週間くらいでできんか」「そうだな。ううむ。まあできんこともないけど、かなり粗雑になるぜ」「少しくらいかまわん。急いでるんだ。

頼むよ」「わかつた。任せておけ」

作者、もうすぐ家を出ないといけない。2000字まで行つてないが、ここまでとする。続きを読む帰つてきてからである。それでは。

バス停まで距離がある。歩きながらケータイを打つ。全然関係ないが、文章で琉生に英語を説明すんのがなかなか難しかつた。わりやすかつたと言つてくれたが、当たり前のことであるが、トーグの方が説明しやすい。文章はどうも勝手が違う。

まあしかし文章でわかりやすくというのも作家の条件だろつ。筒井康隆師匠は文学の可能性を拡大するためにたまに難解な文章を書くが、エンタメ作品は当たり前だがすべて平易である。そりやそうだな。プロだから。さて話の続きである。敬一郎と宗次は肩を組んで歌いながら街を歩いた。「オレの彼女は、イエイ、イエイ、イエイ」「そのフレーズ、すつきやなあ」一人は実に上機嫌である。「それはそうと敬ちゃん。松子が怒つていたぜ。どうすんだよ」「そうは言つてもなあ。オレも色々あるんだよ」「わかつてるよ。拉致家族救出プロジェクトがいよいよ大詰めだものな」「まあ確かにそれもあるけど、プライベートで厄介な案件を抱えていてね。ほんと、いやになつちゃうよ」「ふうん。まあ詳しくは聞かないけど、肩の力を抜けよ。力入れ過ぎるとこけるぜ?」「ありがとう宗ちゃん」「実はオレもプライベートががたがたさ。女房が家出ちまつしざあ」「また浮氣かい」「ち、ちげーよ。清子のことだよ」「清子ちゃん、今何歳よ」「小学六年生だよ」

バス停に到着。いつの間にか2000字越していたので、ここまでとする。おしまい?

(後書き)

後書きもはやなやつ。けど、かわいい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6162z/>

うまい棒ってば、うまい棒！

2011年12月20日18時51分発行